

報道関係資料 PRESS RELEASE

Tama Art University Museum Presents

Audible Vision 1913/2002

オーダブルヴィジョン 1913/2002

のご案内

2001 年 12 月

多摩美術大学美術館

TEL.042-357-1251/FAX.042-357-1252/E-mail:museum@tamabi.ac.jp

1. 企画趣旨

多摩美術大学美術館では、現代アートにおける光と音を用いた騒音芸術に着目した活発な活動をしている若手アーティスト伊東篤宏の作品、および彼が主宰するフリースペース「OFF SITE」周辺の様々なノイズアートシーンについて紹介する「Audible Vision 1913/2002」を開催いたします。また、この展覧会では騒音芸術の一つの象徴的、歴史的トピックスであるイタリア未来派で制作された騒音装置「イントナルモーリ」の復元品(1986 年制作、多摩美術大学所蔵)を特別展示いたします。

現代美術の展開において、表現の多様性と理論や思想の幅の拡張や変化に応じて、美術を語る場は音楽や舞踊、文学、政治、経済、科学技術等の要素を取り込み、益々複雑にして広大なものになってきました。そうした状況の中から、人間にとっての重要な感覚機能である視覚芸術と音楽(音響)という、人類が取り組んできた芸術活動の主軸について、比較、対照を試みる機会は多くみられました。また、それらをどのように連携させるかということも重要なテーマでした。

この人間の視覚と聴覚に共通して見られる生理的・観念的な対象の一つにノイズ(騒音)があります。とかく「美」を語る時の否定的な存在としての「ノイズ」ですが、視点を変えてみると、「ノイズ」ほど自然界に溢れている存在はなく、私たちの存在は常にノイズとともにあるとも言われます。旧来の美の概念により否定された「ノイズ」は、同時に形式的、機能的な美への批判的要素にもなってきました。

「ノイズ」という存在に視点を当てた創造的活動は現代美術の歴史的過程においても様々な足跡を残しています。その一つの象徴的な存在としてのイタリア未来派のルイジ・ルッソロが発案、制作したノイズ発生装置「イントナルモーリ」には、ある種の社会状況や既成の美学への大胆な問いかけを見る事が出来ます。そうした系譜は現代においても、「ノイズ」をどのようにアートとして取り込んで行くかという活動として、様々なアート表現が展開されています。

今回は絵画からスタートして、音楽的なノイズと視覚的なノイズの関係性や相互作用を作品化し、ノイズをテーマとした表現活動を支援するフリースペース「OFF SITE」を主宰している伊東篤宏の作品と活動に焦点を当て、「ノイズアート」という表現の系譜と可能性について紹介、鑑賞できる機会をつくることで、21 世紀の多角的な芸術表現や文化動向への視野の拡大と展開のきっかけになればと考えます。

展覧会のタイトルとなっている「Audible Vision」とは、視覚的(Visual)になるという「Visible」を「Audio」に置き換え、音響によって何が見えてくるのかという問いかけを、視覚と聴覚に直接働きかける作品を通して訴えようというものです。奇しくも伊東篤宏氏はルイジ・ルッソロと同様に絵画から音響へと視点を展開させ、積極的に現代のアートシーンへの問題提起と新しいアプローチを試みるアーティストとして期待されています。

2. 開催要項

名 称 Audible Vision 1913/2002
オーダブルヴィジョン 1913/2002

会 場 多摩美術大学美術館
〒206-0033 東京都多摩市落合 1-33-1
Tel. 042-357-1251 Fax. 042-357-1252
e-mail museum@tamabi.ac.jp

会 期 2002 年 1 月 26 日(土)～2002 年 3 月 3 日(日)
10:00～18:00(入館は 17:30 まで)

休館日 火曜日

入館料 一般 300 円(200 円) 大・高校生 200 円(100 円)
身体障害者および中学生以下無料
※()内は 20 名以上の団体割引料金

交 通 京王線・小田急線・多摩モノレール 多摩センター駅下車徒歩 5 分
※美術館専用の外来駐車場はございませんので、お車でお越しの際は、美術館周辺の
公共有料駐車場等をご利用下さい

主 催 多摩美術大学美術館

協 力 OFF SITE
OMEGA POINT

関連事業

【ライブパフォーマンス】

会期中に、伊東篤宏との共同企画で様々なサウンドアート、ノイズアートに関するワークショップやライブを複数回行う。

1. 「エレクトロニクス&フリーフォーム」

2 月 10 日(日) 15:00～18:00

出演 吉田アミ、ユタ川崎、安永哲郎トリオ/MILLS/吉井としや/
宇波、古池、水谷、江崎カルテット

2. 「ヴィジュアル&フリーフォーム」

2 月 11 日(月) 15:00～18:00

出演 EXPLODED TOY/NEON INN/EKE/DJ Peaky/高安利明

3. 「オプトロン・パフォーマンス」

2 月 17 日(日) 15:00～18:00

光を使った騒音装置オプトロンによるライブ&ワークショップ

出演 伊東篤宏

4. 「イントナルモーリオークストラ」演奏会

2 月 24 日(日) 15:00～18:00

未来派の騒音装置イントナルモーリによる、現代の作曲作品の演奏を行う
出演 大友良英／杉本 拓／Sachiko M／中村としまる／秋山徹次／伊東篤宏

※会場は 2/10・2/11＝1F 多目的室、2/17・2/24＝3F 展示室
いずれも参加無料(入館料は必要)

【ギャラリートーク】

期間中毎週土曜日 15:00～16:00

多摩美術大学美術館学芸員による展示ガイド

会場 3F 展示室

参加無料

3. 展示内容

伊東篤宏による蛍光灯約150本を用いた発光インスタレーション作品を設置。他に関連する小品や資料等の展示や閲覧スペースを設ける。伊東篤宏は今年 12 月に渡仏して発表活動をしたが、そのときの様子をドキュメンテーションや映像資料等を交えた資料展示、作家が提供するノイズやサウンドアートに関する文献やメディア資料等も展示する。

①伊東篤宏展 サウンドインスタレーション

②イントナルモーリの展示(ビデオ、資料等も参考展示)

③展示会場および多目的スペースを使用した LIVE イベントおよびワークショップを実施。(4 回)

①については、伊東氏がこれまで発表してきたインスタレーションの集大成的展示で、約 150 本の 40W 蛍光灯(3 原色のカラーフィルターで被覆構成)が壁面を覆い、蛍光灯発光の変化を音に変換する装置「オプトロン」を 5～6 台設置して空間を造る。

②については、1986 年に多摩美術大学芸術学科によって再現されたイントナルモーリ 8 台の展示および資料展示。本体の展示だけではなく、現代のミュージシャンによる作曲作品の演奏を行う。また歴史的観点からも非常に貴重な機会として、文字記録やビデオ、写真記録などと共に、ドキュメンテーションを残すことを意識した展示を目指す。

③については、イントナルモーリに関するものや OFF SITE を中心に様々な演奏活動をしているミュージシャンおよびアーティストによる実験的、先進的なライブやワークショップを実施する。

◎伊東篤宏 略歴

1965 年 神奈川県生まれ

1992 年 多摩美術大学大学院美術研究科修了

1987 年より発表を始める

[個 展]

1990 年 MIX(東京)

1992 年 藍画廊(東京)

1993 年 藍画廊(東京)

BORDERLAND ZOO／NICOS ギャラリー(東京)

1994 年 藍画廊(東京)

プラザギャラリー(東京)

1995 年 ルナミ画廊(東京)

1996 年 西瓜糖(東京)

ギャラリーK(東京)

プラザギャラリー(東京)

1997年 藍画廊(東京)

1998年 ALTERVISION/東京大学駒場寮(東京)

西瓜糖(東京)

1999年 西瓜糖(東京)

/ スラッシュ/川口現代美術館スタジオ(埼玉)

2000年 I Gallery's eye vol.1/アイズアイ/Gallery 伝 Floor2(東京)

2001年 OPT-Phone /Room(Gentilly, 仏)

[グループ展]

1990年 TAMA VIVANT '90/渋谷シードホール(東京)

1994年 「美」と「術」/藍画廊(東京)

1997年 ドキュメント376/桐生市(群馬)

1998年 ドキュメント376/桐生市(群馬)

MMAC FESTIVAL IN TOKYO '98/小野画廊(東京)

1999年 It out from PEYOTL/アップリンクファクトリー(東京)

芸術真説・生活真説ー自然・生活・芸術・散歩ー台湾・日本芸術家交流展/台北県新店市花園新城, 台湾

2001年 OP-trans!/KPO キリンプラザ(大阪)

その他パフォーマンス多数

2000年7月よりフリースペース「OFF SITE」を主宰、運営。

◎イントナルモーリについて

1913年、イタリア未来派の芸術家として活躍していたルイジ・ルッソロによって「騒音芸術宣言」(アートオブノイズ)が発表された。それは19世紀以降の機械産業文化と共に生まれた「騒音」という概念を用いた、新しい芸術の提案と制作であり、その理念は都市生活における高速活性化した時間や空間の変化に伴う人々の認識を、音楽や美術に反映させたものであったといえる。

ルッソロは宣言出版後、ウーゴ・ピアッティ、バリラ・プラテッラと共に騒音楽器「イントナルモーリ」を制作する。1921年までに21種類のイントナルモーリがつくられた。

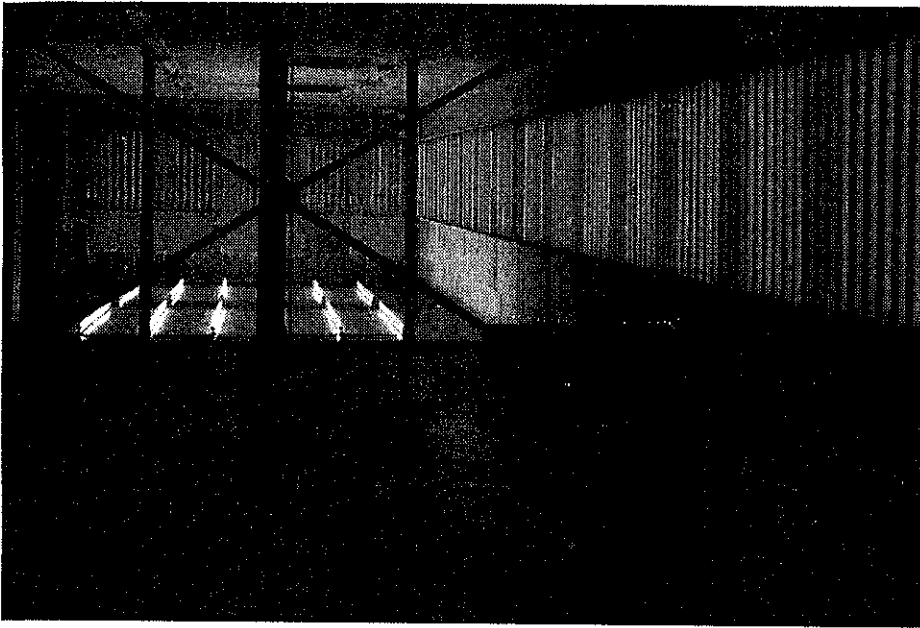
ルッソロの「騒音芸術宣言」を生んだ背景にある「未来派」自体の持っている美術史、音楽史的な意味や解釈、そしてムーブメントとしての社会的な位置付け等はさておいて、「騒音芸術」及びその申し子としてのイントナルモーリの「騒音」に対するスタンスと、それ以前の「神」やいわゆる「自然」の模倣ではない、アーティフィシャルこの上ないアイディアにこそ注目し、再確認すべき点ではなかろうか。都市生活の中から生まれる様々な音情報を従来の楽器や方法論にとらわれず音楽化するという発想は、「社会対個人」「機械対人間」といった安易な概念の二項対立化に陥らない、それまでの芸術形態に対する意識の拡大を意味していたはずである。そして、その発想自体は現代においてもじゅうぶんな有効性を保ち続けている。それどころかテクノロジーにおける様々な概念や芸術の形式や意味の解体、及び歴史～時間の「カットアンドペースト」と「削除」は止め処もなく広がり、従来の目的や意味内容が変質、空虚化することも珍しいことではなくなっている。

ルッソロたちの輝かしい未来予想を、良くも悪くもはるかに超えてしまっているであろう21世紀の今日に、イントナルモーリの音が多分に簡素でおだやかな響きに聴こえるのは当然のことである。しかしそれは巨大音響システムとタイム・カットアップによってもはや原型を失った、われわれの聴覚の奥底から続いているノイズのパースペクティブを、今一度確認しなおすのには、じゅうぶん過ぎる音量のはずである。(伊東篤宏)

《この件に関するお問い合わせ》

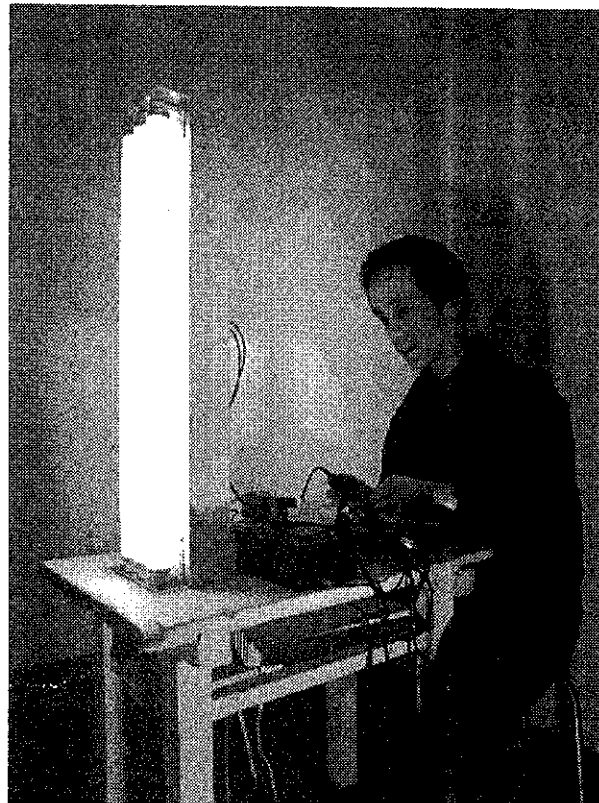
多摩美術大学美術館 学芸員 仙仁・小林・高辻

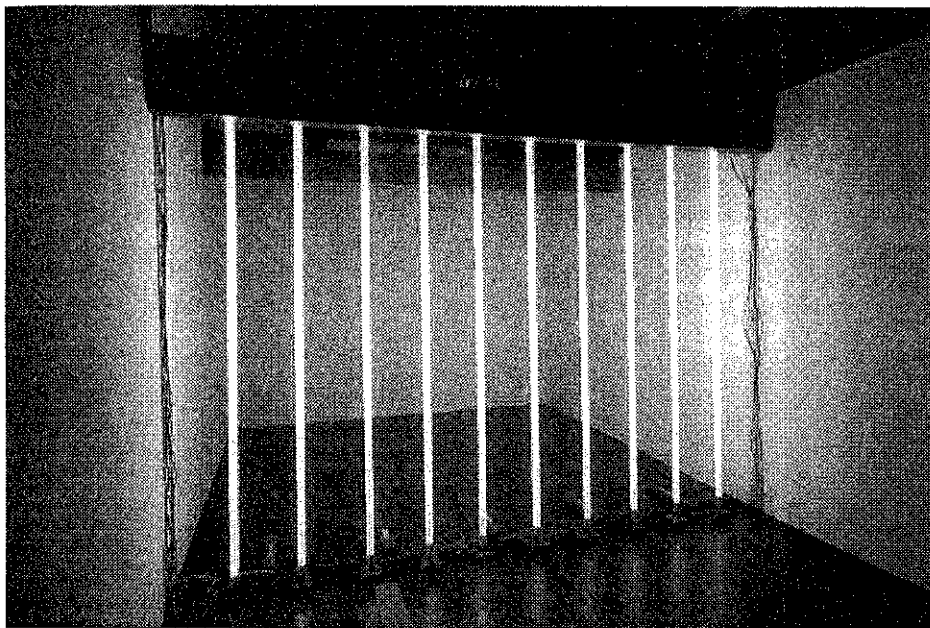
Tel.042-357-1251/Fax.042-357-1252/E-mail:museum@tamabi.ac.jp



写真上: 伊東篤宏による蛍光灯を用いたインスタレーション作品「Slash 1999」 1999 年(川口現代美術館スタジオ)

写真下: 伊東篤宏と騒音装置「オプトロン」によるパフォーマンス 2001 年(撮影 中野貴正)





写真上：伊東篤宏による蛍光灯を用いたインスタレーション作品 2000 年 (Gallery 伝 Floor2)

写真下：イタリア未来派のアーティスト、ルイジ・ルッソロによる騒音装置「イントナルモーリ」 1914 年

